

タイトル	〈講演記録〉今，なぜ社会教育主事養成か
著者	内田，和浩；UCHIDA, Kazuhiro
引用	季刊北海学園大学経済論集，60(4)：163-179
発行日	2013-03-30

《講演記録》

今、なぜ社会教育主事養成か

内 田 和 浩

1、はじめに

本稿は、2012年4月22日(日)に開催された北海道社会教育主事等養成大学連絡会第1回協議会における基調講演の記録である。

北海道社会教育主事等養成大学連絡会は、「1. 北海道内の大学（短期大学を含む）で、社会教育主事任用資格を認定する課程・科目を有する大学間の情報交換を行う。2. 北海道における社会教育主事の養成及び任採用について調査研究し有能な人材育成を図ることを目的とする。3. 社会教育主事等への就職に関する関係機関への要請や情報収集を行う。」を目的に、2011年9月9日に「1. 北海道内の大学（短期大学を含む）で社会教育主事任用資格を認定する課程・科目を有する大学・学部（機関）及び担当する教職員（個人）2. 本会の目的に賛同する者」を会員として発足した組織であり、本学で社会教育主事課程を兼担する筆者が初代会長となっている。

第1回協議会は、基調講演とシンポジウムの二本立てで開催され、基調講演は会長である筆者が行ったものであり、学生を含む大学関係者を始め、北海道教育委員会及び近隣市町村の社会教育主事や施設職員等が参加した。

以下、当日の基調講演の録音記録をもとに、講演記録として整理したい。

2、私自身が「なぜ、社会教育主事養成に関わっているのか？」

(1) 自分史から ― 社会教育は、出会いから始まる ―

まず、最初に私自身がなぜ社会教育主事養成に関わっているのか、ということについてのお話をしたいと思います。

苫小牧市は、私が小学校中学校高校と6. 3. 3の12年過ごしたまちですが、生まれてから小学校に入るまでは室蘭市に住んでいました。ですから、私自身は北海道の室蘭で生まれ、苫小牧で育って、子ども時代に様々な影響を受けた学校教育の時代を苫小牧で過ごしたということになります。

① 「安保の日」に生まれた

そして、私は「安保の日」に生まれました。日高六郎という人の岩波新書の中に、『1960年5月19日』という本があります。かなり岩波新書としては厚い本ですが、それは5月19日、私が生まれた前日の日付がタイトルである新書なのです。読んだことのある人もいるかも知れません。『1960年5月19日』という本です。その日は、日米安保条約が国会で強行採決によって成立し

た日です。しかし、最近は見られなくなりましたが、その日は深夜を越えて朝方まで、「牛歩」による採決が続いていたわけです。その採決を阻止するように、国民の3万人を超えるデモ隊が国会を包囲し、反対のシュプレキコールをあげていた。それが、5月19日から20日にかけての出来事なわけです。20日の未明に、安保条約が成立したのですが、私はその日の朝に生まれたわけです。1960年5月20日の朝、室蘭市で私が誕生したのです。そのことは、もちろん生まれた時には私は知らないわけで、後になってから生年月日をいうと、先輩の年代の方から「あっ、その日に国会にいました」と言われたりしたのです。それで、私は「自分は、安保の日に生まれた」と思うようになったわけです。そのことは、私の人生というか考え方の原点にあると思います。

現在、私は北海学園大学で地域社会論という授業を経済学部でしていますが、学生たちに「1960年は、日本社会のひとつの分岐点だ」という話を必ずします。地域社会が変貌をとげていく日本社会の中で、実は1960年より以前は農村を中心とした社会で、それ以降が都市化し工業化していく社会だと。地域社会という視点からも、1960年という年は非常に大きなターニングポイントの年だと話をしています。ちょうど今、1年生の授業でその話をし始めたところですが、まさにその年が私の生まれた年なのです。

② 小学校での「集団の力」

私が、そういう年代に生まれたのだと意識し始めたのが、小学校6年生の時でした。苫小牧で小学校6年生を迎えた時に、一番印象に強い先生との出会いがありました。その先生は、女性の先生で、普段は自分で授業はしません。皆さん、そんな先生に会ったことがありますか。先生は、授業をしないのです。何をするかというと、班ごとに国語のリーダー、算数のリーダー、理科のリーダー、社会科のリーダーと教科ごとのリーダーを選び、そのリーダーの集まり＝リーダー会議というのを毎日行なって、翌日どういう授業をするのかを議論させるのです。

私は、理科のリーダーのリーダーをしていました。ですから、理科の授業は私がいつもしていました。45分の小学校の授業のうちの30分以上は、リーダーリーダーが前に立って「今日の単元はこうです」と黒板に板書して説明するのです。そのあと質問を受けます。質問は、班ごとに一人手を上げる時は1本指差して上げるのです。そして、全員が手を上げたら、パーにするのです。パーになったグループに当てて、発表するということをリーダーリーダーがやって、先生が話すのは最後の5分でした。今考えても、そんな授業ってすごいと思うのですが、そのために、リーダーやリーダーリーダーは毎日ものすごい量の勉強をしました。大学時代でも大学受験をする高校3年生のときでも、そこまで勉強したのだろうか、と思うくらい、私は家に帰ってから勉強をしたことを覚えています。

先生はそうやって教科学習についてはしていましたけれども、必ず休み時間はクラス全員で外に出て、「集団遊び」というのをしました。その先生は、いつも「集団の力」という言葉を口にしていた、「クラス全体が良くならないとダメだ」と言われていました。そのことは、ずっと私の頭の中に残っており、大学行ってからそのことを教育学の先生に話したら、「それは、北海道のいわゆる北方教育運動の流れではないか」と言われて、なるほど自分はそういう先生に習ったのか、と思いました。しかし、その時はただ「集団の力」ということが頭に残りました。

中学に入っても、私自身はそれなりに授業ができるいわゆる頭のいい子と言われていたわけですが、いくら良い点数をとっても、いつも先生に言われていたことがあります。言葉はいろいろでしたが、「あなたは、自分だけいい点数を取ったらダメだよ。クラスみんなが良くならな

いとね」と、中学校の担任にいつも言われていました。やはり「集団の力」と言っていた小学校6年生の時の先生と同じ考えではなかったかなと思います。これは、「自分だけいい点を取ったからといって喜んでいたらダメだ。クラスみんなが良くなってこそ、お前の価値がある。」という意味だと思います。それで、中学時代は仲間と家に帰ってから、よく一緒に勉強をやっていたという記憶があります。いずれにしろ、高校ではそういったことはありませんでしたけれども、そういう先生方との出会いの中で、「集団の力」や「みんなが良くなってこそ、その中のひとりである自分の価値がある」という考え方が、私に身についていったのだと思います。

③ 大学に入学して

そんな私が大学に入って、大学で初めて東京へ出たわけですが、そこで出会ったのが社会教育だったわけです。もちろん大学に入る時、何を学ぼうかと考えました。当時は、教師になろうかという気持ちも一方ではありましたが、自分が教師に向いているとは思えなかったのもう少し幅広い知識を身につけたいということで、大学では社会学を専攻することにしました。もちろん、教職課程もとりましたので、学校教育についていても学ぶ機会がありました。

大学に入学したのは、1979年です。先ほど、「安保の日」に生まれたという話をしましたが、「安保の日」に生まれたくせに、実は安保って何かよく分かってなかったのです。大学に入った時に、同じようによく分かってなかった仲間たちと同じ年齢ですから、「今年が1979年だろ。来年は80年安保だな」と話したわけです。笑っていただいて結構です。「来年は、80年安保だ」と、79年に入学した60年生まれの私たち同級生は思ったのです。社会学に集った仲間は、みんなで安保の勉強をしようと、4月から日米安保条約のことについて、いくつかのテキストを自主ゼミと称して学習し始めました。しかし、ゴールデンウィークに入る直前、ある仲間が気付いて、その学習会は終わりました。「80年安保」というのはないのです。60年に日米安保条約ができて、10年の時限立法だったわけですが、70年のときにそれが切れますから、「70年安保」が60年代後半に起こっていて反対運動、新安保を結ばないようにという学生運動がありました。しかし、70年に結ばれた新日米安保条約は1年の自動更新で、日米どちらかが破棄すれば破棄できるという条文に変わったのです。ですから、「80年安保」問題はないわけです。つまり破棄しようと思ったら、いつでも破棄できるわけですからね。私たちは、そんなことも知らなかったわけです。しかし、60年生まれの同級生たちは、79年に大学に入学した年にそういうことをみんなで考えたのです。わずか1か月ぐらいの学習でしたが、60年安保70年安保の時代のことを振り返って、学生運動の華やかな時代のことを勉強しながら、自分たちはノンポリだなという結論に達してその学習会は終わったのですが、私自身にとっては1960年5月20日生まれであるということ、非常に意識した時でした。

そういう学習をしながら、80年当時の大学2年生のころには、ちょうど校内暴力というのが学校で流行っていました。「金八先生」が大学1年生のときに放映されて、その後に「仙八先生」というのがあって、そこで校内暴力のことが取り上げられて、また『教育は死なず』という本がベストセラーになりました。これは、長野県の篠ノ井旭高校の実践が書かれた本です。今でいうと北星余市高校のような、退学者中退者を集めて高校を再生していくという話だったわけです。そんな時代に教職課程も履修し、私は教育の問題に非常に関心を持っていたのですが、学校だけではそういう校内暴力や学校の問題は解決できないだろうと、何となく漠然と思っていました。それは、先ほどの「集団の力」ということを学んできた自分がいたからですが、そんな時に大学で開講されていた社会教育主事課程を2年生の時から履修することになったのです。

④ 「社会教育」と出会う

「地域の大人が、学ぶことを通じて地域を創っていく、変えていく、それが社会教育だ」と話す島田修一先生の話聞きながら、私の中では「学校ではなく社会教育から、子どもたちの問題や地域の問題を考えていかなければならない」と思うようになっていったわけです。しがって私は、社会学専攻でしたので社会学の分野では地域社会学を専攻して、「地域づくり」ということを卒業論文でも取り組みましたし、社会教育主事課程においては「地域をつくる大人の学び」ということを中心に据えながら社会教育学を勉強し、そのことが卒業論文にも反映していったわけです。つまり、地域をつくるのは大人であり、大人が学ぶことを通じて変わる、そのことによって地域が変わっていくと、卒業論文では「地域社会の形成と社会教育の役割」としてまとめたのでした。

その過程のなかで、北海道出身でしたので、小学校6年生のときの先生の「集団の力」というところからは自分なりに思いはあったわけですが、いわゆる公民館で行なわれている社会教育との出会いというのは、ほとんどなかったわけです。しかし、大学3年生の社会教育演習という授業で、当時その後私の勤め先になる神奈川県相模原市の公民館を訪ねることになります。1年間にわたって演習では、相模原市の公民館活動を取り上げたのです。実は今私がお話していることは、『月刊社会教育』の1990年4月号というところに書いたものです。当時まだ相模原市の公民館の職員だった私が、「社会教育は“出会い”から始まる」というタイトルで、22. 3年前ですか、書いたものから今ご紹介しているわけです。

話戻りますが、大学3年の時の演習のときにどんな出会いがあったのか、こんなふうに書いています。相模原市の上溝公民館を、訪問したのです。「5月のある日、上溝公民館を訪問しましたが、苫小牧の“薄暗く古くさい”公民館とは全く違っていました。公民館では、次長的小林良司さんが対応をしてくださり、生き生きと楽しそうに説明してくれました。保育室や公民館報の存在など、その時は何も知らなかったので大きな驚きを感じると共に、小林さんのお話から、公民館における職員（管理人ではない教育専門職である）の重要性を痛感しました。後の演習のまとめ誌の感想文に、私はこんなことを書いています。『小林さんに自分の仕事に対して生き甲斐、そしてほこりをもって自信満々に話されるようすが感じられた。その時、私はそんな小林さんに今まで感じたことのない一種のあこがれを感じた。そして小林さんをこんな生き生きさせる公民館とは、いったい何なのであろうか。くわしく知りたくなった』と。

この小林さんというのは、その後私の上司というか先輩職員として、最後は相模原市の生涯学習担当課長をされて退職して、今、数年前から一緒に相模原市公民館史研究会ということで、相模原市の公民館史をまとめていこうというのを一緒に取り組んでいる先輩職員のことです。

そういった出会いの中で、私自身が社会教育職員をめざすということが、始まっていったわけです。当時、大学の社会教育主事課程には1学年20名くらい履修していましたが、本気でやる人ってそんなに多くなかったです。どこの大学でもそうかもしれませんが、本気で学ぶ人はそれほどいなかったと思います。同級生の中でも、後に教員になった人間はいますが、社会教育主事になったのは1人もいませんでした。しかし、先輩や後輩にはその後社会教育主事となり、今も活躍している人間が何人かいます。そういった意味では、その人たちと大学で出会って一緒に学んだということが、私自身の大きな刺激になったといえます。

さらに、3年生の時に社会教育の全国研究集会が千葉県の成田市で開かれました。そこに、これも全く偶然ではありますが、たまたま4年生の先輩が社会教育演習の最後の時間に、「こうい

うのがあるけれど、もし来る人がいたら来てください」とチラシを置いていってくれたのを持っていました。夏休みの終わりになって、東京にしばらく残っていたので暇だから行ってみようか、たまたまそんな感じで成田まで3時間かけて通ったのですが、その時に全国から集っていた社会教育職員の人たちと出会いがありました。「社会教育は心意気だ!」、と力強く語る職員の人に圧倒されながら、その時の一番今でも覚えているのは、当時立教大学にいらした室俊司先生のお話です。室先生は、東京大学の社会教育の大学院を出られたかたです。東京大学というのは、2年生から3年生になる時に学部に移行するのですが、室先生は元々医者になろうと思っていたのが教養部に入って文系に進んだそうです。当時の宮原誠一先生のガイダンスを聞いた時、これだと思って社会教育に進むことにした、というのです。そのことを医者にさせようと思っていた母親に報告したときに、こう言ったというのです。「社会教育は、社会の病気を治し健康にすることです」と。つまり、医者を目指せと言っていた母親に、自分は社会教育を目指すことをそういつて説明したのだ、と話されたのです。これが、私が大学3年生の時に室先生に聞いた言葉です。忘れられない言葉です。「社会教育は、社会の病気を治し健康にすることだ」。私はその時、まさに学校では解決できない問題、校内暴力や今はもっと複雑な問題が起こっていますが、当時は学校の問題というと子どもたちの校内暴力が一番社会的問題だったわけですけど、そういったことを含めて「社会の病気を治して健康にすること」という社会教育が、自分が目指す道ではないかと思ったわけです。

⑤ 社会教育主事になりたい

そして、そのためには、いろんな人と出会い、いろんなことを学んでいかなければならない、と感じて様々なところへ顔を出すようになりました。当時は、島田先生から何かの研究会があると聞くと、必ず付いて行きました。そうすると、そこで様々な人と出会いをするわけです。今でも忘れられないのは、全国青研です。全国青年問題研究集会というのが、日本青年団体協議会主催で毎年3月に開かれています。3年生の春休みに島田先生が助言者として行くと言われたので、じゃ一緒にいきますということで後ろに付いて行きました。その部屋の中の端っこのほうで、座って見ていたのです。そしたら、20人くらいの若者たちが集って熱心に議論している。何もしゃべらず、もちろん当たり前ですが後ろで静かに聴いていましたら、いきなり先生から「今日うちの学生が1人来ています。今まで皆さんが話して議論したことについて、彼の感想を聞きたいと思います。」と、いきなり振られたのです。もう顔から火が出るくらい真っ赤かで、汗がだくだく流れぶるぶる震えながら、何を話したかよく覚えていません。自分は大学生でしたが、地方から出てきた農業青年の人はほとんど高卒だったと思います。そういう人たちが農業をしながら、若しくは商売をしながら、自分の地域でこんな活動をしていてこんなことやろうしている、と熱く語っていたときに何も地域づくりに関わらない学生の自分が、座っているということが非常に小さく感じました。たぶん、「皆さんのほうがずっと素晴らしいです」と私は話したと思うのですが、どんな言葉だったかは覚えていません。

しかし、そういう場面に出たことで、自分も積極的に地域に関わらなければいけないと思いました。それで4年生のとき、たまたま大学が八王子というまちにありましたので、八王子の市民が「八王子の憲法を考える会」というのをやっていて、実行委員を募集していたのでそこに参加しました。4年生の5月の憲法記念日が集会当日でしたから、そこに向けて3月から2か月くらい「八王子の憲法を考える会」実行委員会に参加して、そこで市民が憲法を学ぶ集会を裏方として支えるということに参加した記憶があります。そんなことをしながら、自分自身が実践に関

わって自らを磨いていながら専門性を持ち、将来自分も社会教育主事になろうとそのときに決めていました。

3年生の演習のまとめ誌には、「そんな小林さんのような職員になりたい」と書いています。4年生になって、公務員試験の勉強も少しして、いくつかの市町村を受験しました。その中の受かった1つが、相模原市だったのです。そういった意味では、出会いが私の進路を決めた、と言えると思います。ここまでが、大学生のとき自分が社会教育と出会って、社会教育主事課程で学んで、その学びを通じて社会教育職員になっていったプロセスであります。

ただし、私の場合は相模原市役所では専門職採用でなくて一般行政職採用でした。ですから、4月1日までどこに配属になるのかわからずに、ドキドキしていたわけですが、演習でお世話になった当時係長だった小林さんが、いろいろと動いていただいたというのは後から聞きました。それで、希望通り公民館に最初から配属となり、結果として8年間相模原の公民館主事として、社会教育主事として働くことができたわけです。

⑥ 相模原市の公民館での実際生活に即する学び

そんなふうにして、私は相模原市に就職したのですが、その後8年間公民館で職員として働きました。この『月刊社会教育』に書いたタイトルは、「出会いから始まる」ということで、公民館の中でもたくさんの出会いがあったことが書かれています。少し紹介したいと思います。

今日は、会場に今年の4月に社会教育主事補として就職した先輩が1人来ていますが、大学で社会教育を勉強してきた人間としては、4月入ったらすぐ自分も何かできるのではないかと錯覚を起こすのです。錯覚というと変ですが。何かすぐやってしまうというか、周りも期待してしまうのです。それで、私もいきなり事業を何本か、すでに決まっていたものを担当することになります。

相模原市の公民館は、現在政令指定都市になって合併したことで32館程ありますが、私が就職した頃は22の地区館があって、そこに各3名の職員が専任職員として配属されていました。そのうち1名以上は社会教育主事とするというのが、相模原市の方針で、私は社会教育主事有資格者として公民館に配属されていました。

したがって、発令は後になりますが社会教育主事有資格者という名前のもと、社会教育の事業はその人間が主になって担当するのだということでしたので、最初から事業を担当することになったわけです。4月に、早速「母と子の読書教室」を昨年からすることが既に決まっていた、これを担当しろということでした。最初の3週間ほどは、私の新採用の研修、市の事務職員としての新採研修が、火曜日から金曜日まで毎日行なわれていました。しかし、夜は公民館に帰って教室の準備をするという形で、すでに4月中にはほぼ中身を固めて、そして準備委員を募集しました。大学で学んだことは、社会教育の主人公は住民であるので、職員が勝手に企画するのはまかりならん、と習いましたので、何をするにも住民の方と相談するというので、準備会を開くことにしました。しかし、自分なりの構想は持っていました。

5月の連休が明けた日だったと思います。「母と子の読書教室」準備会ということで、私自身は人脈がありませんので、公民館図書室に来ていた人に図書室の臨時職員の人たちから声をかけてもらって、かつてそういうことを希望していた人がいるということで、その人たちに声をかけてもらいました。3名の人が集ってくれて、私を含めて4人がそこで初めて会って、今度こういう教室をすることになったと私なりの構想を話して、2・3回の準備会のあと、6月から教室を開催したいという考えを伝えました。

しかし、その3人はこんなふうに答えました。「今まで婦人学級を経験してきたけれど、机上で学習したことを実践に移すのは難しいわよね」と。つまりこの教室は、読み聞かせを子どもたちにするためのグループを作りたい、という教室でした。私は、読み聞かせサークルを作することを目的とした教室を開いて、読み聞かせサークルを作るということを考えたわけです。しかし、「机上で学習したことを実践に移すのは難しいわよね」と言った方がいて、皆さんも同じ考えでした。皆さんそういう経験があったのです。それで、今3人いてもう1人呼びかけた人がいて、4人とも読み聞かせをしたいと図書室の職員に伝えていた人でした。しかし一人ひとり、同じまちに住んでいながら会ったことがなかった。そして、「でも、今ここに3人いるでしょ。もう1人いるなら4人でしょ。まず、少人数でいいからまずお話を開きましょうよ」と。「教室は、そのお話ををする中で出てきた課題を整理して、あとで開いたらいいんじゃない」と、言われてしまったのです。

結局その時は、本当に今でも忘れられません。頭をカチ割られて、踏みにじられたという気持ちもありました。せっかくここまで準備したのに、という気持ちもありました。しかし、それを言っちゃいけないと思って、ニコニコしながら、「分かりました。皆さんの言うとおりにしましょう」ということで、まずはこの3人、4人ですが、を中心に週1回毎週お話を開きましよう、となったのです。

その後、6月15日から「おはなしやさん」と名づけられたお話を毎週水曜日の2時半から3時までです。PRや準備は公民館のほうで行ない、公民館の主催事業にする。1回のお話会で3人の読み手が3つの話をします。終わったあと、反省会を開く。ということが決められ、さらに読み手であるメンバーを募集したところ、7名の人が集っての開催が決まりました。そして、毎週1回お話が開かれて行きました。最初は、皆さん読む本は決まっていたのでスムーズにいったのですが、やがてだんだんと読む本がなくなっていきました。毎回反省会をして、私ももちろん参加していて、そこでやっぱり読み方に問題があるとか、本の選書の仕方が問題だとか、そういう課題が実際にやってみて実践の中から出されていくわけです。それを整理していくと、ちょうど6回くらいの教室の内容になるようになっていきました。それで、10月から教室を開くということが決まり、そこには約40人の受講生が集まり、そしてその中から数名が「おはなしやさん」に入ってくる。このような流れがありました。

そんな中で、出会いの中からひとつの事業をする時、状況分析をするということの大切さや、社会教育法に書いている「実際生活に即する学習」とは一体どういうことなのか、という内実を知ることができたと思っています。もし、このときの出会いがなければ、私は後に多分研究者になろうとは思わなかっただろう、と今でも思っています。その後「おはなしやさん」は、実はもう20数年経ちましたが、橋本という公民館の地区でできたサークルですが、今でもこの地域にはなくてはならないサークルとして活動を続けています。

まだまだ、いっぱい事業のことがあります。私が最初に勤務した橋本公民館のある橋本地区は、新宿まで45分で行ける、私鉄の京王線の終着駅のある地区ですので、ほとんど都会です。今では、高層マンションがいっぱい建っています。そういう地域です。

その橋本という地区の公民館に3年ほどいました。そこは、今言ったように都会ですので、ほっておいても人が集りました。夜も土曜も日曜日も、夜の10時まで公民館が開いています。職員の勤務も、10時まででした。火曜日から日曜日まで、朝8時半から夜10時までの勤務を毎日のようにこなしていました。空いている部屋はなくて、びっちり埋まっていました。そんな地

区から3年で、麻溝という公民館に異動になりました。4年目に、ですね。その地区は、今でこそ人口が2万人を超えて、管内の人口が2万5千人くらいになりましたかね。スーパーやらマンションやらが建って、農地もだいたいなくなってきていますが、私が行った当時は人口7千数百人の本当に農村でした。スーパーは1軒もありません。そういう地域に異動したのです。その公民館に行ったら、当時は夜になると公民館にほとんど利用者がいないです。昼間もガラガラです。だから、夜開けておいたらもったいないというのです。「えっ、なんで閉めるの?」と言ったら、「だって開けておいたら、電気代がもったいないだろう」と言われて、閉めちゃう日があるのです。それが不思議でしたが、最初は困ってしまいました。同じ公民館なのに、橋本はそんなことはまったく無いですから。

そこから始まって、「来ないなら出ていこう」ということで、出前公民館というのを始めたのです。今、出前事業というのは有名ですけど、麻溝公民館の取り組みは全国でもかなり早い時期から出前公民館をやっていたのです。その時、来ないなら出て行こうと思ったのですが、来ないというのは学習意欲が低いと思っていたのです。地域の見方についてです。しかし、農村地域で農業を主体にして働いている人たちが多い地区で、1か所に人を集めるということの困難さを実は知らなかったのです。出て行って見て、地域の集会所に出てやってみたら、すごく集めるのです。100人くらい集ったりするのです。つまり、学習意欲は決して低くはない。ただ、自分たち職員が公民館にいるから、公民館に來いと言って集めようとして、その地域の人たちの生活課題に直接合ったことを企画できなかったのです。地域の集会所に行くと、健康の問題やら地域の歴史やら風習やら、新住民とどう付き合うとか、そういうまさに生活に根ざした課題が身近にあって、そういうことならば学びたいとみんな来るのです。そんなことを出前公民館しながら気づいていったのが、麻溝公民館にいた5年間でありました。

⑦「研究的実践者」から「実践的研究者」へ

その時に、先ほど最初にいた橋本公民館と違うこと、つまり集ってくる学習意欲が顕在化できる人たちの学びだけではなくて、自分からは来られないけれども学習意欲があり、地域で様々な課題を抱えている人たちにどのように学習を提供していけるのか、ということをしごく考えるようになったのです。そうした時に、そんなこと自分で考えていたってだめだなと、雑誌を読んだり本を読んだりして一生懸命勉強しましたし、いろんな研究会とかに出て行って話を聴きましたが、研究者の言っていることはよく分からないのです。今でも忘れられないのですが、東京大学に当時宮坂広作という人が教授でいたときに、学習会があったので赤門の東京大学の研究室に一度訪ねて行ったことがあります。そしたら、40人ぐらいみんな東大の院生とか、あちこちで活躍している研究者がいて、私が行ったらなんで社会教育職員がこんなところに来たんだという顔をされて。宮坂先生からも、「なんか変わった人が来ていますね」という言い方をされたのです。そのときに救ってくれたというか、声をかけてくれたのが鈴木真理先生でした。当時、助教授か講師かで、「せっかく実践者の人が来ていращやるのだから」と。そして、「東京大学は、学びたい人がきちっと来られるようにしなければダメです」と、言ってくれたのです。しかし、院生や研究者の人たちが語る言葉は、結局私には何も響くものはなかったです。だから、自分の実践には既存の研究は役立たないな、と思いました。

そんなことで悶々とし始めていたのが、5年目から6年目のころです。その時、少し大学院に行って自分が勉強しようかな、という気持がムクムクと出てきたわけです。それで社会教育学会にも参加して、自分の実践を報告することをしてしましたが、なかなか反応も良くなって、やっ

ぱりこれは自分で研究者にならなきゃいけないだろう、という気持ちが強まっていきました。

そんな時に、たまたま北海道大学の当時の山田定市先生、鈴木敏正先生と出会うことがあって、「出身が北海道だから、私がそんなこと考えたら北海道大学に入れてくれるものでしょうか」と相談したら、「今の時代はね、そういう人に是非大学も大学院も開いていかないといけないのです」と言われたのです。そして、30歳の時、職場には内緒にして受験をして、うまく大学院に受かることができました。それで、91年の4月から北大の大学院に入りました。ですから相模原市では、8年間の社会教育主事としての生活でした。

辞める時、2月28日に退職届を出して、話に行ったら多くの人は祝福をしてくれたのですが、そうじゃない人もいて、「お前辞めたら職員がいなくなる、欠員になっちゃうぞ」、と言われて、「それは自分の本意ではないので」と謝りに行きました。しかし、多くの人は「ひとがやれないことをやるのだから、しっかりやって来い」とうふうにして励ましてくれました。3月後半は毎日のように送別会をしてくれたというのを、今でも忘れられないです。そういう中で、当時自分のことを「研究的実践者」と呼んでいましたが、これからは「実践的研究者」になるのだと、そんな思いで北海道に帰ってきました。

長く話してしまいましたが、これから社会教育主事になろうという学生たちにとっては、一人の先輩として、そういう流れの中で職員をしてきたという話でした。

自分自身が社会教育主事をし、仕事をしながら実践の中で悩み、これは一体どうゆうことなのかということを理論化したいという必要性を感じ、しかし既存の研究者がきちんと応えてくれないという現状も理解したうえで、自分がそういった研究者になろうと北海道に帰ってきたわけです。

(2) 北海道に帰って

① 北海道と神奈川県との社会教育実践の違い

私は北海道出身なので、北海道に帰ってきたということでいいのですが、帰ってきたとはいえ、東京の大学に4年、神奈川県の実践現場に8年、12年間北海道を離れていました。また、高校3年生までの経験の中では、いわゆる公民館とか社会教育とかに私の中では関わってきたことはありません。たとえば、私自身の小中高の経験の中には、子ども会というのは無いのです。ですから、北海道での社会教育の経験は全くなかったのです。ただ、子ども会については相模原市の公民館にいたときに、子ども会のジュニアリーダー、シニアリーダーを育てる研修にずうっと関わってきました。相模原では、シニアリーダーが高校生で、ジュニアリーダーが中学生なのです。それが公民館区ごとに組織されていて、その研修は公民館でやっていました。小学校の5、6年生の子ども会のリーダー研修も公民館でやっていて、毎年キャンプに連れて行ってキャンプファイターのリーダーもやりましたので、そういう職員としての子ども会活動の経験はあるのです。しかし、自分自身としての経験は無かったので、北海道に帰って来て北海道の社会教育には非常に驚きました。全然違うと思ったわけです。何故かと言いますと、つまり公民館が日常的に無い、札幌にはほぼ無い、ということです。あったとしても、まさに1つだったり、地域と密着した公民館ではなかったり、私の経験した相模原や、神奈川、東京の公民館とはだいぶ違うわけです。

では、北海道ではどこで、そういった学びが行なわれているのでしょうか。生活や地域に根ざした社会教育実践はどこであるのかというと、北大の社会教育研究室は農村社会教育を当時中心

に行っていました。私も八雲などの農家調査に行くと、地域には公民館がなくても集会所で、まさに生産活動を通じた学びの場、例えば八雲では酪農青年研究会等、生産活動を通じた学びの場があるのです。そういったものが、多分農村地区では農協や普及所などが指導しながら、そういう場があるのです。さらには、僻地などに行くと学校が社会教育の場になっています。だから北海道では、公民館を中心とした所謂社会教育行政のもとにある社会教育実践というよりも、その他の場所で様々な社会教育実践が展開していると思いました。

そういう中で、大学院在学中、当時のちのニセコ町長になったニセコ町役場の係長をしていた逢坂誠二さんとの出会いがありました。彼らは、自治体を変えていこうという活動をしていて、そういう流れの中で、95年に北海道自治体学会が結成されることに自分も関わることになりました。ですから、社会教育研究室で農業や生活、生産に根ざした活動の中に社会教育実践があることを学び、一方で自治体職員の人たちと出会うことで自治体職員自身が実は学びの組織者・支援者として活動をしている実態を知り、そういう中で北海道の社会教育というのは、神奈川のような公民館や社会教育施設を中心としたものとは違い、まさに地域全体で社会教育が行なわれているということを実感していくわけです。そういった意味では、社会教育主事の守備範囲も神奈川県などとは違う北海道のあり方があるのではないかと思い始めていったわけです。

② 北海道の社会教育主事養成に関わる

大学院を終えて最初に就職したのが、北星学園女子短期大学でした。95年の4月から2000年の9月まで5年半いました。そこは短期大学であり家政系の学科、そして教職課程を兼務するポストでありましたので、決して社会教育を目指す学生に出会うことはないだろうと思っていました。しかし、そういった中でも私の授業を受けた学生の中から、社会教育職員を目指す者が何人か出てきて、北大や他の大学に編入して、そして社会教育職員になっていくという卒業生が出てきました。そういうのを見ていく中で、自分が「実践的研究者」として進むべき道は、単に研究面で社会教育や地域社会を研究し社会教育を発展させる面だけではなくて、直接社会教育主事の養成に関わるということが重要ではないかと思うようになっていきました。

当時、北海道教育大学の旭川校に生涯学習教育研究センターという全学センターが設置されました。設置したのは2000年の5月1日ですが、そのセンターの専任として10月1日付けで、私が赴任することになったのです。

ここでは、大学の学生指導という視点で旭川校の生涯教育課程で社会教育ゼミを持つことになり、生涯学習教育研究センターという全学センターとしては、北海道教育大学で行っていた社会教育主事講習の主任講師として担当することになっていきます。したがって、学生指導の面でも社会教育主事になろうという学生を育成することができ、さらに社会教育主事講習という視点からも全道の社会教育主事養成に関わることができたわけです。つい4年前の2008年の3月まで、教育大でそれに関わってきたのです。

この間、自分の思いもあり主事講習のカリキュラムも実践的に変えながら、道教委の皆さんにも関わっていただきながら変えてきたつもりです。宿泊を伴う演習を最初と最後にもってきて、それで成果をきちっと発表しそれを共有していく、ということも考えて組み立ててきたつもりでした。そして、旭川校でも、ゼミ学生を全部でこの間に26人卒業させましたが、結果として19人が教師を含めた自治体職員に就職しました。そして、そのうち6人が、現在社会教育主事として全道で活躍しています。そういったことが、私自身のやってきたことのひとつの数的な成果なんだと思います。しかし、社会教育主事をいっぱい輩出したからといって、その後どうするのだ

ということも含めて課題となっていたことも事実です。

そして、たまたま北海学園大学に高倉先生がいらっしゃって、今から13年前に社会教育主事課程を作られて、一生懸命取り組まれてきて退職されるという時に、教育大もセンターが廃止になるということと旭川校が生涯教育課程等を廃止して全部教員養成に特化するという時期と重なりましたので、もし札幌に来られるならば北海学園大学での養成をしてみたいなと思っていたところ、運よくこちらにすることができました。それが、2008年4月だったわけです。

(3) 「自治体社会教育」の担い手づくりへ～北海学園社会教育主事課程がめざすこと～

次に、北海学園大学ではどんな社会教育主事養成をしているのか、ということを紹介したいと思います。今日も数人の学生が来ていますので、のちの交流会で本当にそういうことが、そういう力がついてきているのか、ということを是非学生たちから聞いてもらえればと思います。まず、高倉先生がやられていたカリキュラムを平成20年度に引き継いだ時には踏襲したわけですが、平成21年度からカリキュラムを改正しました。そのときに入学した学生が、今年4年生になります。この学生たちのカリキュラムの特色は、これは今「社養協」という全国組織でも注目をされていて、先日福井大学でもこのことを報告して来ました。福井大学は、教職専門職大学院に重点的に取り組んでいて、文科省のモデルになっているのですが、そこで教職専門職大学院と社会教育主事養成カリキュラム（公開講座）を一緒にしながらやっているのです。

そのなかでの1コマで、「実習を中心とした北海学園大学社会教育主事課程の取り組み」ということで報告をさせてもらったのですが、ポイントは1年生2年生に社会教育実習を導入したということです。これは、全国で多分あまり無い事例で、実習というのは、大抵3年生4年生で、座学で学んできたことを実習でやってみるというものです。学校教育実習も、大体3年生4年生でやりますね。しかし、それを1年生2年生でやるわけです。

なぜ、そういうことをするのか。それは、私が社会教育主事講習の時代からずっと学生たちに言い含めて指導してきたことですが、「優れた学習支援者は、自ら優れた学習者でなければならない」と思っているからです。この学習者というのは、学校教育における学習者ではなくて、社会教育における学習者です。社会教育における学習者というのは、自ら課題をつかみ自らその課題を解決するための学びを自ら選択して学んでいく、というそういったことができる人だと思います。ところが、大学に入ったばかりの1年生2年生は、ほとんどが高校までの学校教育でならされてきて、指示待ちで、「それは試験に出るんですか？」というところでしか学ぶことがなかなかできないでいます。しかし、社会教育の実践の場面では、実は自ら学んでいかなければならないのです。そのことをまず実感しなければいけない、という意味で1年生2年生の実習を取り入れています。1年生の時には、市内の施設、今は若者支援センター、若者活動支援センターですか、札幌市青少年女性協会が指定管理をしている若者支援センターを中心に実習をしてもらっています。その多くは、9月に札幌市内で行なわれている、「だい・どん・でん」という大道芸人の人たちを集めたイベントを組み立てていく事業をすることが、実習の主たるものになっています。で、すでにこの「だい・どん・でん」のスタッフである「街スタ」という組織がありますが、これは1年生目に入った本学の4年生が今もメンバーとして残っていて、つまり1年生から4年生まで全部関わっているというそんなものに既になっています。1年生は実習の授業として関わっているのですが、2年生になったらそのまま残るのです。多くの学生が残って、3年生になったらリーダーになっています。4年生もサポートで残っている形で、もう本学の学生が半分

以上、もっと6割7割が「街スタ」の担い手になっているそうです。これが1年生の実習です。

2年生は、国立大雪青少年交流の家で、5泊6日の実習を行なっています。これは、一つは学習者として宿泊施設に来る利用者、学習者としての利用者を観察するという視点があります。さらに職員の人と同じ仕事をして、学習支援者としての職員の役割を自ら体得するという意味が、二つの意味を込めています。既に1年生のときに主体的なフィールドでの実践をしてきた学生たちが、2年生になるとこの大雪での実習で、職員の側つまり学習支援者の側の視点を身につけるということが見られるようになります。そして、その後その施設の職員との関係から様々な事業に声をかけられ、お手伝いをするなどして実習だけに留まらない実践への参加が深まっていくと思います。多分3年生の人たちは、そう状況になっているはずです。だから、2年生の実習が終わると、本当にいろんな活動に学生がどんどん入っていくということが見られます。

3年生には、社会教育演習が行なわれます。1年間を通じて参加型体験学習を自分たちで組み立てていくという演習ですが、その中に夏休み期間中に2泊3日での合宿研修があります。昨年も今年も、今年も行きますが、中富良野町にお邪魔して中富良野町の社会教育の課題について調べています。これは単なる調べるではなくて、調べ方もワークショップ的に調べるということで、子育て中のお母さんたちがいる子育て支援センターにお邪魔して、そこで半分の学生が子どもたちの面倒を見ながら、半分の学生がお母さんたちの課題を聞き取りし、それを模造紙に書いて整理していくというような、そういう活動をしました。高齢者大学の人たちにも同じようなことをし、それから青年の、青年と言っても中富良野には役場の職員を中心とした若者しかいませんけども、そういった人たちとも同じように課題を聞いてきて、そしてその課題を解決するにはどうしたら良いのかということが、後期の演習のテーマになり、それを整理していく演習を進めています。

さらにその3年生の期間には、今日もほとんど3年生が手伝ってくれていますが、毎月行っている「北海社会教育サロン」という活動は、3年生が司会や運営をしています。また、9月には全体の実習報告会を行ないますが、それについても3年生が懇親会も含めて全部企画・立案・運営しています。そして、2月には「ちえりあ」で行なう札幌市民カレッジのひとつの講座を企画しチラシを作り募集し、当日は運営者として関わり事業を行なうということを、ここ2年ほど行なっています。そういう形で、実践的な学びを実際に組織できる支援できる、そういう演習を組み立てています。また、道教委の皆さんのご協力で、全道研や地域生涯学習活性化セミナーに3日間お手伝いしたり、事業に関わったりとか。それから、自分の住んでいる出身地である自治体でも可能であればインターンシップなどに関わるとか、そんなことを適宜行ないながら社会教育主事として、すぐ卒業したら実践できるような、そんな社会教育主事課程の研修を行なっています。あと、となりの部屋、もし後でお暇な時に見てもらえると良いかと思いますが、となりの部屋が社会教育主事課程の実習兼資料室となっていて、学生たちは開いている時間は自由に使えるようになっていますし、社会教育演習はそこで行なっています。

今年度がこのような新カリの完成年度で、他の大学では大抵3年生までに単位を取ってしまうのですが、うちも今までの旧カリは3年で全部単位が取れたのですが、新カリは今年完成年度を迎え、4年生の後期に「現代社会と社会教育II」という科目を置きました。これは必修科目ですので、4年生の後期には必ず社会教育主事課程を取る学生は、この授業を受けなければなりません。4年間の総括として、これまで自分がやってきた実践や学びをどのように整理していくか、とゼミ形式で報告し、最終的には報告書を書いてもらうということになると思います。そんな中

で、一人でも多くの社会教育主事となる人間が育っていくのを目指す、というのが現在です。

ここまでが、私の「なぜ、社会教育主事養成に関わっているのか？」という自分史、自分の経験と研究者になってから、研究者としての役割として「実践的研究者」としての役割として、研究で社会に貢献するのではなくて、もちろんそれも重要ですが、社会教育主事を一人でも多く社会に出していくということを目的・目標に取り組んでいるということでもあります。

その際、北海道の場合は公民館とか社会教育施設の職員というよりも、自治体の職員として社会教育を担っていくということが主になっていますので、まさに自治体職員としての力量も併せ持った職員を育てていきたい。逆に言えば、自治体職員であれば、自治体職員になった者は社会教育主事にならなくても、まさにこういった学習支援者としての力量をもって、目の前にいる住民とどのように地域をつくっていくのか、ということと一緒に考え学び合ってそれを進めていくことですから、自治体職員になる、それを私は「自治体社会教育の担い手」と呼んでいて、そういった人材を一人でも多くここで養成できればと考えています。

3、社会教育主事養成の必要性を声高に叫ぶのが「なぜ、今なのか？」

(1) 北海道における急激な地域社会の変貌

では、「今こそ社会教育主事が必要だ」と考えているので、私たちはこの社会教育主事養成等大学連絡会を作ったということではありますが、「なぜ、今なのか」ということを、釈迦に説法かもしれませんが、少しお話ししたいと思います。

北海道においては、まさにこの21世紀に入ってからもちろん、その前から言えばそうかもしれませんが、特に21世紀に入ってから、急激な地域社会の変貌が進んでいる、と認識しています。それは、これまでの農村部で農業やっていた人たちが離農して都市へ出て行くという、そういう過疎過密の問題と似ている部分とそうではない部分があるわけです。そのひとつは、札幌圏への人口の一極集中。これはここ数年といえますが、今少しずつ鈍ってきて、札幌もまもなく人口が増加しなくなると言われていますが、しかし、550万人の北海道の人口のうち190万人が札幌に集中していくというのは、日本の東京集中よりも集中率は高いわけですね。

韓国でソウルが1000万人を超える大都市で、韓国の全体の人口が5000万人ちょっとという、これに似た、これよりもひょっとしたら割合的には札幌圏への集中は激しいと言えるのかもしれませんが。大学で学生を教えていても、北海学園大学の場合は8割がたが札幌市出身者なのです。札幌市出身者に聞くと、札幌以外のまちに住んだことも行ったこともない、という人がほとんどになってきました。もちろん、親は、この間授業のときに○×で聞きましたら、そうは言っても親の7割は札幌以外でした。自分は札幌だ、という学生が8割以上いるのです。だけど、親はと聞くと、そのうちの7割以上の人は札幌以外の出身だということです。しかし、自分は札幌で生まれ札幌で育っている。これが、今札幌の若者たちの現状だと思うのです。ですから、田舎の暮らしは知らない。そういう札幌圏への極端な一極集中が、今起こっています。

それに対して、北海道内の地方は、過疎はもちろんですが少子高齢化が進んでいる。ここにもうひとつの問題があって、高齢化は都市部でも同じなのです。高齢者がどんどん増えていくというのは、今の日本の状態としては、それ自体にもいろんな問題が含まれていますが、地方の問題は子どもがいないということです。子どもがどんどん減っている、つまり高齢者が増えている。子どもが増える見込みがあれば、そんなにおかしな問題ではないはずなのですが、高齢者が増え

ているというのは、実は子どもが減っているというのが問題なのです。そうすると、その地域が地域として将来成り立ち得ない。未来予想図を描いた時に、その地域には人がいなくなるという未来予想図しか描けない地域ができてきているということです。限界集落という言葉が、言葉として問題になっていますけれども、言葉の問題はどうでもいいと思っていて、それよりも未来予想図を描けない地域がいっぱいある、ということに問題をみるべきだと思います。

そういうことを憂う一部の人は、何とかしようといろいろと考えたり学んだり行動したりしようとしていますが、しかし一部の「志」だけではそれは変えられない現実なわけです。このことにしっかりと目を見据えなければ、本当に北海道は地域が無くなっていくということになると思います。そのためにも、一部の人々だけではなくて、多くの人たちが地域の「社会力」を総動員して、地域再生をしていかなければいけない、ということが、今求められているのだと思います。

(2) 地域の社会力を総動員して地域再生へ

「社会力」という言葉は、筑波大学にいた門脇厚司先生がよく使われている言葉です。人と人との結びつきという視点で言えば、別の言葉では「ソーシャルキャピタル」「社会関係資本」という言葉もあります。そういった何とかしようという人々の力を結集して、考え生み出していかなければならないのです。そして、そのことを考えるならば、まさに私が小学校の時に会った「集団の力」というものを原型とする社会教育の力が、今、まさに求められていると思うわけです。

だから私は、社会教育は重要だ、重要だと、あちこちで言っています。こんど北海道教育委員会に提案する北海道社会教育委員会議の答申にも、そのことを強く書いているわけです。しかし、実際に地域の人たちに社会教育が重要だと言っても、なかなかそれが響くかという、私のような社会教育との出会いを多く持っている人でなければ、普通は社会教育が重要だといっても、そんなに答えが返ってくるわけではありません。そういう意味では、職業として「人育ち」や「人間発達」の支援を担うのは、実は社会教育主事しかないのではないか、と思います。

もちろん、自治体で働く中には保健師さんとか保育士さんとか、そういった様々な専門職の人もありますし、自治体に働くだけではなくて地域で様々な専門家、たとえば弁護士さんであるとかお医者さんであるとか、そういった方もいるわけです。しかし、それらの人たちの繋いでそれらの人たちの力を、ネットワークを結びながら人育ちの支援を職業としてできるのは、社会教育主事しかないと思っています。

したがって、今こそ社会教育主事の力量をもった有為の若者を、北海道の札幌も含む179のまちにきちっと配置して、その人たちが活躍できる、そういった社会をつくっていかねばいけない、と考えるわけです。そういった意味で、私たちこの北海道社会教育主事養成等大学連絡会を結成した大学関係者は、まさに今だからこそ社会教育主事、若しくは社会教育主事の力量を持った若者たちを、一人でも多く育てる義務と責任があると思っています。それが、私がこの「なぜ、今なのか？」というところで言いたい話でありました。

4. 北海道社会教育主事養成等大学連絡会に期待したいこと

三番目には、今後のこの連絡会について、どんなことを私自身が期待しているか、期待しやっ

ていきたいと思っているかを述べて、話を終えていきたいと思います。

① 自治体や関係機関へのアピール

一つは、こんな小さな出発ですが、しかしこの私たちの思いを、是非各市町村や自治体の関係者の皆さんに、広く強くアピールをしていきたいということです。加藤つばさ、という由仁町の社会教育主事補にこの4月からなった卒業生がいます。由仁町では、嬉しいことに彼女が社会教育主事の専門職としての試験を受けて採用されたのですが、もう一人その試験を受けて河野和枝先生のところの卒業生が入ったと、昨日聞きました。これは本来、町村会の試験を受けて由仁町に面接に来た人の中から採用するはずが、どうも町の理事者からすればピッタリする人がいなかったの、社会教育主事の専門職で受けた人のほうが町にとって有為だ、と町長さんや副町長さんや理事者の方たちが判断されたのです。だからこそ、社会教育主事の試験を受けて結果としては落ちた人ということになるわけですけど、その落ちた人を役場のほうに採用したということだと思います。そういう自治体が一つでも増えていくことは、私たちにとってとっても重要なことだと思っていますので、是非そんなことを各市町村にアピールしていきたいと思います。これは、隣の長沼町でも同じようなことが起こっていると思いますので、是非各市町村の理事者の皆さんに社会教育主事の力量を持った若者が役場で働くということが、どれほど有為なことなのかということを理解していただきたいと思います。

② 大学間の連携による養成カリキュラム開発

二つ目は、大学間の連携がこの連絡会の大きな目的であります。各大学には、私のところも私しか専任はいません。私は専任とはいえ、経済学部専任でありますので、半分兼任という形の専任ですが、各大学にも専任というか専門が社会教育・生涯学習の教員がいるところとないところがあります。それから、専任の担当者がいるところとないところがあります。そういう中での養成の大学ですので、それぞれの養成のカリキュラムがかなり異なっていると思います。もちろん、先ほど私は北海学園大学ではこうだという話をしましたが、このカリキュラムがすべていいと思っているわけではありませんので、そういった大学間で養成カリキュラムをお互いに議論しながら開発していったら、ある部分統一したり一緒にやったり、若しくは協力し合ったりという形で進めることが可能ではないか、たとえばテキストをみんなで作るとか、そんなことも可能かなあと思っています。

③ 学生同士の交流による相乗効果

三つ目は、本学では1年生から4年生までが主事課程を取っていて、縦の繋がりというのはなかなか難しいです。授業が学年ごとに開講されていて、縦の関係が授業では作れないので、先ほど言ったように「北海社会教育の会」というのを作りました。前任者の高倉先生に会長をさせていただいて、毎月1回のサロンと9月に総会およびシンポジウムを開いています。これらを中心にしながら、縦のコンパということで夏休み前とクリスマスの12月の2回コンパも開催して、1年生から4年生までが繋がりを持てるようなことを本学ではやってきました。なかなかそれでも、同じ大学にいても1年生と4年生が繋がるというのは、難しいかなと思っていますが、それでもそういう試みをしています。これを連絡会に参加している、大学間の学生同士の交流ができるような、そういう機会を設けたいと思っています。10月に各大学の学生を集めた学生研究交流会を開催する予定です。そんなことをきっかけにしながら、学生同士が相互に交流してお互いに情報交換しながら学び合っていくということで、力量を高めていきたいと思っています。

④ 現職者との交流

そして、最後に四点目。今日も現職の社会教育主事の皆さんが何人もお越しいただいています。まさに現職者との交流は先ほどの私の経験の中でも、とっても刺激になるのです。社会教育主事という人と高校卒業するまで出会ったことのない学生が、ほぼ100%です。主事課程のガイダンスのときに、学生が千人くらいいる会場で毎年聞くのですが、今年は特に一人もいなかったです。今までの人生の中で社会教育主事に称する人と出会ったことのある人は？と、手を挙げさせたらゼロでした。去年も一人でした。つまり、高校生までの間に社会教育主事に会うことがないのがほとんどで、子ども会とか何とかというところで、ひょっとしたらその人がそうであったかもしれないという可能性があっても、会うことはないのです。私もそうでした。

だからこそ、大学生の時代に社会教育主事だった人や現職者である人に多く出合って、その人の経験を聞く機会を設けたい、と思うわけです。先ほどの学生交流の研究集会にも、是非現職の社会教育主事のかたにも参加いただければと思いますし、本学およびこの連絡会に入っている大学、入っていないくても結構ですが、大学で社会教育主事課程を修めて現職、現場で働いているかたとは一人でも多く交流を持って、学生たちに何らかの刺激を与えていただくような出会いの場を作りたいと思っています。そのことで、社会教育主事がどんな仕事をしているのか、どんな悩みがあるのか、自分はどんな仕事ができるのか、ということを学生たちも考えることができるのではないかと思うわけです。

さて、時間も迫ってまいりましたので、基調講演というほどの何かすごい話をしたわけではないと思いますが、私の経験から社会教育主事養成になぜ関わっているのかという思いと、それから現代という時代の中でまさに今地域社会を再生していくためには、社会教育主事が必要だということ、そしてそのことを進めていくためにもこの連絡会の結成が一つの起爆剤となって発展していくことを、栄えある第一回研究協議会ということですので、きっといい材料になるだろうと思います。

10年経ったらこの連絡会の中から育っていった社会教育主事たちが、全道各地で活躍しているということがボンボンこう耳に入ってくるような、そんなふうになっていくと嬉しいなというふうに思います。そういったことを願って、私の基調講演に代えさせていただきます。どうもご清聴、有難うございました。

おわりに

本基調講演の後、シンポジウム・テーマ「北海道の社会教育主事像を語る」(登壇者 元置戸町教育委員会社会教育主事 矢崎秀人・北海道教育庁生涯学習推進局長 阿部 豊(元北海道教育委員会社会教育主事)・北翔大学生涯スポーツ学部教授 谷川松芳(元長沼町教育委員会社会教育主事)・司会 北星学園大学准教授 河野和枝(元別海町教育委員会社会教育主事))が開催されている。この記録については、北海学園大学社会教育主事課程「年報 北海社会教育 第4号」(2013年3月)に掲載されているので、併せてご覧いただきたい。

～参考資料～

講師プロフィール

北海道社会教育主事等養成大学連絡会

会長 内田和浩（北海学園大学教授）

1960 年 北海道室蘭市生まれ

1979 年 北海道苫小牧東高校卒業

1983 年 中央大学文学部哲学科社会学専攻卒業

1983 年～1991 年

神奈川県相模原市教育委員会勤務

社会教育主事として、市立橋本公民館、麻溝公民館に勤務

1995 年 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学

1995 年 北星学園女子短期大学 専任講師・助教授

2000 年 北海道大学より博士（教育学）号を授与

2000 年 北海道教育大学生涯学習教育研究センター 助教授・教授

北海道教育大学大学院教育学研究科 助教授・教授

北海道教育大学旭川校生涯教育課程 兼任

2008 年 北海学園大学経済学部 教授

北海学園大学社会教育主事課程 兼任

2009 年 北海学園大学大学院経済学研究科 教授

北海学園大学社会教育主事課程委員会 委員長

主な公職

2004 年～2012 年

北海道社会教育委員（同会議 議長）

2001 年～2009 年

「道民カレッジ」評価・活用部会委員

2009 年～ 「道民カレッジ」運営委員会委員（同副委員長，同企画部会長）